

幼児教育支援員派遣事業を通して香川県の

幼稚園教育の充実について考える

—香川県教育委員会と香川大学教育学部との連携—

片岡 元子・松本 博雄*・松井 剛太*

(香川県教育委員会) (幼児教育) (家政教育)

760-8582 高松市天神前6-1 香川県教育委員会事務局義務教育課

*760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

Report on the Visit Program of Adviser to the Kindergarten by Kagawa Prefectural Board of Education

Motoko Kataoka, Hiroo Matsumoto* and Gota Matsui*

Kagawa Prefectural Board of Education, 6-1 Tenjinmae, Takamatsu 760-8582

**Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

要 旨 香川県教育委員会では、香川大学教育学部と連携して幼児教育に係る専門的な知見を有する幼児教育支援員（香川大学教員と教育委員会担当指導主事）を幼稚園に派遣する事業を行っている。本稿では、香川県の幼稚園教育の課題と、本事業の活用と成果をとりまとめ、本県の幼稚園教育の充実のために必要な課題を探る。大切なことは、幼稚園教育の基本である「子どもの主体的な活動である遊びを通じた教育」を実現することである。

キーワード 幼稚園 保育 遊び 園内研修 幼児教育支援員派遣事業

1. はじめに

平成23年度、香川県教育委員会では県内の幼稚園教育の充実のために、香川大学教育学部と連携して「幼児教育支援員派遣事業」を実施している。本事業の概要は、幼児教育に関する知識・経験を有する支援員（ここでは、第2著者・第3著者を含む香川大学教育学部の教員と、幼稚園担当の指導主事である第1著者をさす）を、幼稚園からの派遣の要請に応じて派遣し、公開保育の参観及び園内研修への参加等を通して、

各園の実態に合わせた指導・助言を行うものである。

本稿では、本事業での幼稚園訪問を通して明らかになってきた県内の幼稚園教育の課題及び、本事業の活用と成果等について述べていきたい。

2. 幼児教育支援員派遣事業について

(1) これまでの経緯

「幼児教育支援員派遣事業」は、平成19年度

に筆者の前任である幼稚園担当指導主事が企画立案してスタートした幼児教育の充実に係る派遣事業である。それ以前行っていた幼児教育に関する教育課題を設定した研究指定事業の行き詰まりを打破し、幼稚園の設置者である市町教育委員会の幼稚園教育に関するかかわりの充実にねらってはじめてのものである。

平成19年度は、県内の5市町教育委員会からの派遣要請を受け、香川大学の教員（平成19年度のみ私立大学教員も含む）と担当指導主事が3人体制で幼稚園の公開保育を参観し、その後、当該市町教育委員会が開催する協議会に参加して指導・助言を行った。

平成20年度、筆者が幼稚園教育の担当となったが、派遣を要請されたのはわずか2市町教育委員会のみであった。関係者の話から、協議会を開催しなければならぬ市町教育委員会にとっても、保育を公開しなければならぬ幼稚園にとっても負担の大きいものであることが窺い知れた。

平成21年度は、訪問が3市町に増加したものの、依然状況は変わらなかった。県の市町教育長会や園長会等で本事業の活用を周知し、個別にも声をかけたが、市町教育委員会担当者からも園長からも共に、重い返事しか返ってこず、県内の幼稚園教育の課題を感じながらも有効な手立てを見出せないでいた。

（2）平成22・23年度の取組

平成22年度、幼稚園担当として3年目を迎え、県内の幼稚園の大まかな状況がつかめるようになり、また各園長とも人間関係がつかれるようになってきたため、市町教育委員会への働きかけから各幼稚園へのかかわりにシフトすることにした。つまり、派遣の要請希望を幼稚園の園長から提出していただき、各園の実態に応じた指導・助言を行うことに変更し、その趣旨について周知を図った。

自園の園経営や現職教育の見直しを望んでいた園長からの派遣要請が、平成22年度には、7市町7園7回、平成23年度には7市町10園13回に増加した。この中には、後に述べるが、園長

独自の要請だけでなく、市町の教育委員会が本事業を活用して、幼稚園教育の充実に図ろうとしている事案も含んでいる。

「うちの幼稚園は、お見せするようなことは何もできていないから……」「大学の先生がきて、指導していただくなんて気後れするわ」と言われる園長がいる一方で、「自園の教育を見直したい」「外部の先生に見てもらって園内研修を活性化したい」と前向きに捉える園長が増えてきたことも肌で感じる。「保育をひらくこと」や「外側（第三者）からの目」の重要性を実感し、よりよい園経営をめざしたいという園長の思いを感じると共に、園長が変わらなければ各幼稚園の教育力の向上にはつながらないだろうとも思っている。

平成23年度、派遣を要請した園の指導・助言内容の希望は以下のようになっている。

■資料 支援員による指導・助言の希望

（10園：複数回答）

希望内容	園数
園内研修の充実 教員の資質向上	7
遊びの充実	4
学級経営、幼児理解	1
特別支援教育に係ること	1
規範意識の芽を培う保育	1
幼小連携の在り方	1
幼保一体化施設での保育	1

この資料から、派遣を希望した園の多くが、園内での研修を充実させて、教員の資質を向上させていきたいと考えていることがわかる。また、今日的な教育課題である、幼小連携や幼保一体化、特別支援教育についても希望があがってきている。

3. 県内の幼稚園を訪問して

（1）訪問の事例より

それでは、平成22・23年度の幼稚園訪問の中から5園を取り上げ、保育や園内研修の具体的

な事例を紹介する。幼稚園名の次に一緒に訪問した幼児教育支援員（香川大学の教員）の名前も記す。

【事例1】A幼稚園（香川大学 松本博雄）
「40分の謎」

平成23年夏

砂場では、3歳児の子どもたちが自分のやりたいことに向き合っていた。砂場にしゃがみ込んだ男児たちは、手のひらでパンパンと砂をたたいている。パッと広げた手のひらで、砂を固めることが楽しい。女児達は、テーブルのところで、教師がバットに予め準備した葉っぱや花を使ってごちそう作りをしている。

そのような中、K児は、テーブルの穴（パラソルを立てるためのもの）の隙間に砂を入れることに夢中である。狭い穴の隙間に砂を落とすと、落ちた砂が山のようになることに気づき、砂を落としたり、山の様子を見たり大忙しである。

一方、教師は、指導案に書かれている時刻に、子どもたちを集めて振り返りの時間をもつことや砂場のおもちゃを片付けるために慌ただしく動いている。内心、時間に追われ焦っていることがその表情から窺える。

幼稚園での保育を参観するときに、40分の活動の保育指導案をよく見る。40分の活動の中に、導入、活動、振り返りの時間が設けられ、教師の話聞いた子どもたちが、教師の指示に添って〇〇遊びを行い、最後には「～が楽しかったです」というお決まりの交流を行う。

この日、穴から落とした砂の行方を追究しようとするK児の姿に魅了され、その遊びっぷりに感動した筆者は、その傍にいる教師の時間通りに活動を進めていくことに懸命な姿が、K児と対照的に映った。

なぜ40分の活動なのだろうか。小学校の45分授業から少し短く設定された40分なのだろうか。もちろん、製作や簡単なゲームなど、学級

全体で一緒に活動することで楽しさを味わうことができるものもある。しかし、思い思いのやりたいことに存分に向き合って遊ぶことが大切だと思える活動において、40分で時間を切り取ってしまうことが、子どもたちに何を育てるのだろうかと考えてしまう。

【事例2】B幼稚園（香川大学 金子之史）
「窮屈な時間」

平成23年秋

遊戯室に集まった3歳児の子どもたちは、教師から今日の活動について話を聞いている。色分けしたチームごとに座る場所が決まっており、座り方や話の聞き方などについて、細かな指示がある。教師の口調は穏やかであるが、守らなければならないことの話が長い。

ようやく活動の時間になり、フラフープをハンドルに見立てた子どもたちが遊戯室を走り始めた。あちこち走り回って楽しそうである。赤信号を守っていない子どもに、教師は、「パトカーに追いかけるよ」と声をかける。

そのような中、T児は誰よりも生き生きと車を走らせている。途中、友達の車に衝突しそうになるが、ぶつからないように体をかわしながら走っている。あまりにスピードが出すぎたためか、一人で転がってしまった。痛そうに膝をさすっている。摩擦ですりむいてしまったようだ。しかし、泣くこともなく、膝を押さえながら走り始めた。教師の準備したコースからずいぶん外れているが、友だちと一緒に、走るのが楽しくて仕方がないという表情である。

T児を見つめる教師は、「声をかけようかどうしようか」と迷い、戸惑っているようだった。

教師からの細かな指示と、子どもを上手く動かすための支援がたくさんあった。教師は、子ども達がフープを使って遊んでいると捉えているようだが、筆者には、教師の思いに添って遊

ばされているように思えた。

子どもたちは教師の指示に素直に従い、羽目はずりも少ない。それゆえ、T児の活動的で少し乱暴な姿が目立ち、教師の「T児をきちんとさせたい」という思いにつながっているのだろう。しかし、筆者の目には、T児が、クラスの誰よりも一番、友達と一緒にフープを使って遊ぶことを楽しんでおり、3歳児らしい姿に見えた。

この園では、規範意識の芽生えを培うための教師の援助について実践研究を進めている。この3歳児の活動の中でも、ルールを守ることや友達に優しくかわることの指導に重点が置かれていた。

この秋、B幼稚園には2度の訪問をした。2度目の時に、香川大学の教員が、阿讃山脈を例に挙げながら山が連なる絵を描いて、次のような話をされた。「幼児教育とは、峰が連なっているようなものであり、規範意識の芽はその中の一つの山である。幼稚園では、遊びを通して、全体（人格形成の基礎となること）を育てていく。その中で、規範意識も培われていく」

何も急ぐことはない。3歳児の今、一人一人の子どもが自分らしさをしっかりと発揮し、友達と共にあることの楽しさや嬉しさを感じることが何より大切なことである。困ったことや危ないことが起きたときに、子どもと一緒に、友達と楽しく遊ぶためのルールについて考えていけばよいのではないか。

【事例3】C幼稚園（香川大学 松井剛太）
「誰のための『自由』な時間か？」

平成22年冬

子どもたちが園庭のあちらこちらでやりたい遊びに向かっている。4歳児担任のS教師は、子どもたちの側にはいるが、少し手持ち無沙汰であるように見える。一緒に遊ぶこともなく、園庭や保育室に散らばっている子どもたちの様子を見回っている。保育室に残っていた2人の女兒に何か話しかけているが、楽しそうな表情には見えな

かった。

やがて、全園児が園庭に集まって大きな輪になりダンスを楽しむ時間になった。S教師も、輪の中の一員となり、思い切り踊っている。若さが溢れた笑顔と体を伸びやかに動かした素敵なダンスだった。

遊んでいる子どもたちの側にいる時のS教師のつまらなそうな表情が、とても気になっていた筆者には、ダンスをしている時のS教師が同一人物とは思えなかった。

まだ幼稚園の勤務経験が2年目の若い教師である。どうして、子どもと一緒に笑い、走り回って遊ぼうとしないのか、不思議でつまらなかった。どうしてあんなに浮かない表情をしていたのか。素敵なダンス姿を目にして、ますますその疑問が膨らんだ。

ただ、10年くらい経験のある5歳児のクラスの教師も、S教師とよく似た雰囲気醸し出していた。

このC幼稚園には、半年後（平成23年夏）に再び訪問する機会があったのだが、S教師の立ち位置はあまり変わっていなかった。香川大学の教員が、強い口調で「遊びの時間が、先生の自由時間になっている。子どもと一緒に遊ばないと、子どものことは分からない。遊んでくれない先生に対して、子どもたちはだんだん期待しなくなる」と言われた。S教師が、自分のこととして考えてくれることを願う。

【事例4】D幼稚園（香川大学 松本博雄）
「悩む教師1」

平成23年秋

4歳児の保育室いっぱいには秋の自然物と製作物があふれている。どの子どもも、「ドングリを使った車を作ろう」「私は、木の実クッキーを作りたいな」と、作ったり遊んだりすることを楽しんでいる。

その時、「バラバラ」「ガシャ」と大きな音がした。びっくりして目を向けると、M児が、ダンボールで作ったドングリコース

の上に、あるだけのドングリを放り投げたり、ばらまいたりしている。突然の出来事に、私は目を見張った。M児と同じようにする男児もいたが、その他の子どもたちは、あまり気にかけることもなく自分の活動を続けている。担任のH教師も、特別に声をかけることもない。

その後、M児は、訪問していた香川大学の教員と一緒にドングリ独楽をつくり、緑色に塗った自分の独楽を回すことで笑顔を取り戻した。

「悩む教師2」

4歳児F教師のクラスのT児についての事例研究を行った。園内の全教員で、F教師が悩んでいること（T児へのかかわり）について話し合った。他のクラスの教師からは、「私は、T児のことはよく分からないのだけど……」「T児についてよく知らないけど……」という前置きの言葉の後に、様々な意見が出された。

どのクラスにも、「その子をどう理解すればよいのか」「どのように援助すればよいのか」教師が悩んでしまう子どもがいる。ドングリを投げつけていたM児にも、4歳のM児が背負いきれないような家庭の状況や背景があった。H教師は、M児の内面の葛藤を心から理解しようとしていたが、それでも教師としてどうかかわればよいのか悩んでいた。M児に声をかけなかったのは、ドングリを投げざるを得ないM児の心持が感じられ、どう声をかければよいのかわからなかったと言う。しかし、同僚の教師にM児のことを相談しているようではなかった。

F教師もまた、T児へのかかわりについて模索していた。管理職を除いた教師集団は、事例を読み、話し合うことを通して初めて、T児の今の状況や、F教師の悩みに気がついたようだった。

香川大学の教員は、職員室の広さが教員同士

の交流を難しくしているのではないかと言われた。筆者もまた、全園児130名を超え、7学級、9人の教員という大規模のD幼稚園は、一見広い運動場と広い園舎で大変恵まれた環境に見えるが、その中での人と人のかかわりは、広いがゆえに希薄になっているのではないかと感じた一日だった。

【事例5】E幼稚園（香川大学 松本博雄） 「少人数の温かな園で」

平成23年秋

給食の後の思い思いの遊びの時間、園庭で全園児20数名が遊んでいた。教師と子どもたちとの心の通った温かなひとときだった。あまりに家庭的な雰囲気であるがために、かえって、少人数ならではの保育の難しさも感じることを感じていた。

保育を参観後、園内研修が行われた。E幼稚園の4名の教員（園長も含む）に加えて、町内の若年教員も参加していた。

担任の教師が、それぞれのクラスの子どもたちの状況について語り始めた。5歳児担任は、「人数が少ないため、教師と一緒に遊ぶことが多く、長続きしない。子どもたちが遊びを進めるようになるためには、どうすればよいか。」という。4歳児担任は、「クラスの子どもたちの前で、自分の考えを伝えられるようにするためにはどうすればよいか。Y児のことが気になるが、どうかかわればよいか。」という。

全園児数20数名、教員4名の小規模な園だった。保育の中で、教師と子どもの丁寧なやりとりを垣間見ることができ、温かな気持ちになった。と同時に、教師の与える影響力の大きさも感じた。子どもたちが、自ら育とうとする力をどう援助していけばよいのか、少人数の園や学級ならではの保育の有り様を考えていかなければならないだろう。

園内研修の中での、各担任の発言は、保育の課題を端的に表していた。しかし、「困っているのだから、どうすればよいか教えてほしい」

と解決策を求めていることも、その口調から感じられた。

保育とは、子どもによって、その状況によって、教師の見取りやかかわりがかわってくる。「こんな時は、〇〇する」というマニュアルなど存在しない。訪問した支援員が「正解」を示すことはできない。本来は、それらの課題について、園内研修の中で十分に話し合いがなされていかなければならないことではないだろうか。小規模な園のため、互いの思いをわかり合っているような関係の中で、園の課題に正面から向き合い話し合いをしていくことは大変なことなのかもしれない。

3歳児担任が、「子どもたちのトラブルが多くなると、つい私の口調が荒くなることに気づき、少しずつ改めようとしている」と話された。そのような振り返りの中からこそ、保育における大切な点が見つかるはずである。

少人数の保育の難しさとともに、少人数の教師集団での園内研修にも特有の難しさがあることを感じた。

(2) 訪問から見てきた香川県の幼稚園教育の課題

(1)で紹介した5つの事例から、本県においては、以下のような幼児教育の課題が見えてきた。

- ① 市町の独自の幼稚園教育の在り方がある。
- ② 幼稚園教育が大切にしている遊びを通じた教育の在り方が問われている。
- ③ 園内研修を充実させていくことには、様々な課題がある。

① 市町独自の幼稚園教育

【事例1】のA幼稚園では、クラスの活動は大概40分で行っていると言う。市内の研究会などで書く指導案も、40分の活動案を作成するそうだ。園長に、「なぜ、40分なのですか」と尋ねると、「市の教育委員会の要請訪問なども40分で行っており、今まで特に疑問を感じたことがなかった」という。

公立幼稚園の設置者は市町であり、教員の任命権者も当然市町である。そのため、公立の小・中学校に比べて教員同士の交流が少なく、採用されたときから、各市町の独自の幼稚園教育の文化の中で教員生活を送っていくことになる。そのことは、それぞれの地域の幼稚園教育が特色あるものとなる一方で、時に自分の市町の保育スタイルが、幼稚園教育の全てであるという思い込みを生むことになる。

県の研修会や研究会等で他市町の動向を情報収集したり、市町を超えた合同の保育参観や討議を通して情報交換の場を設けたり、外部の人(第三者)からの意見に耳を傾けようとしたりすることにより、幼稚園教育全体に対する広い視野をもっていく必要性を感じる。

② 遊びを通じた教育の在り方

【事例1】では、40分で切り取られた砂場での遊びの様子から、子どもたちが遊びに浸りることができる時間を保障することの大切さを感じた。

【事例2】では、規範意識の芽を育てることが目的になってしまった事例から、「子どもは、楽しいから遊ぶ」ことや「子どもたちは、遊びを通して総合的に学ぶ」ことを、今一度確認しなければいけないと感じた。

【事例3】では、保育の中での教師の役割について改めて考えた。教師として一番大切なことは、子どもと一緒に遊ぶことであり、遊びの中で、子どもの内面や育ちを見取り、適切な援助をしていかなければならないことを強く感じた。

『幼稚園教育要領』第1章第1節「幼稚園教育の基本」には、「自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにする」¹⁾と記され、幼稚園における遊びの重要性や遊びを通しての総合的な指導について示されている。また、「教師は、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役

割を果たし、その活動を豊かにしなければならない²⁾と、個に応じた指導の充実のために様々な役割を果たしていかなければならないことも明示されている。

また、香川県教育委員会が平成22年2月に策定した『香川県幼児教育振興プラン』においても、めざす子どもの姿を「心いっぱい、体いっぱい 遊びこむ子ども」³⁾と掲げ、そのための教師の役割を「一人一人の幼児の確かな理解に基づいた適切な環境を整え、幼児の学びを支える教師」⁴⁾と位置付けている。

つまり、『幼稚園教育要領』にも、『香川県幼児教育振興プラン』にも遊びの重要性が明示されている。このことは、香川県の幼稚園教員であれば誰も周知の事実である。筆者自身も、各研修会・研究会等で機会あるたびに、遊びの充実について話をしてきた。

しかしながら、前述の3つの事例は、幼稚園教育の基本である、遊びの充実を図っていくことがいかに難しいかを物語っている。さらに言うなら、各園において子どもたちは一見遊んでいるように見えるので、その外側から見える姿に安心し、「その遊びが本当に子どもの主体的な活動であるか」、「遊びを通した総合的な指導となっているか」、「この子は、この遊びで何を面白いと感じているのか」などという問い直しを行う必要性をあまり感じないまま、日々の保育実践が行われているとも言える。

秋田は、日本教育新聞の論説において、次のように述べている。

遊びに関して、あるベテラン園長先生が、「新任の先生はまじめに勉強して指導してくれるのだけど、遊んだ経験がないので子どもと遊べない」と話されていた。このような話を聞くのは、この園長先生だけからではない。

子どもの遊びではなく、そこでかかわる保育者が「遊べるか」という問いである。これは子どもと一緒に対象に心を震わせる共振ができるか、それはどのように可能となっていくのか、若手保育者育成では難しくなって

いるとも言える。⁵⁾

子どもと遊べない教師がいる。ここでは、若年教員に対する指摘であるが、中堅教員、ベテラン教員に至っても、若年教員と同じように遊べない教師が増えている。

先日訪問した園では、園長が砂場にしゃがみ込んで3歳児と一緒に穴を掘っていた。その近くで、若い担任が、立ったまま子どもに話しかけている光景を見かけた。子どもと共に遊びを楽しむ教師ではなく、まさに、「管理する人」「仕切る人」「外から見る人」になっている。

前掲の論説で、秋田は次のように続けている。

遊びは本来、自然発生的なものだが、大人側が予め設定した園という制度の中で子どもが主体的に遊ぶことを求める矛盾のために、小学校以上とは異なる専門家としての独自の役割が期待される。子どもの遊びを面白いと思うセンスと同時に、教師自身の遊びへの想像力が求められる。⁶⁾

遊びへのかかわりには、幼稚園教員の高い専門性が求められ、そこが保育の難しさであり、同時に面白さや奥深さでもある。

③ 園内研修の充実

【事例4】では、互いのクラスの状況についての情報交換や、それぞれの悩みについて共有し幼児理解を深めるための研修が十分に行われていない現状があった。大規模な園では、全体での時間を確保することや、研修をまとめていくことが難しいという現状があるのだろう。

【事例5】では、小規模な園で、研修を進めていくことの難しさを感じた。普段から子どもたちの状況を把握しているので、改めて研修の時間を設けなくても、表面的にわかり合ったような気持ちになっているのかもしれない。

香川大学の教員は、園内研修の参加の後、「内輪の人だけで、保育について語り合うことは、時にしんどい作業です。話し合いに外部の

目が加わることが、大切なポイントですね。」と言われた。

幼児理解について語り合うことは、教師が自分自身の子どもの見え方、つまり教育観や子ども観をひらいていくことである。互いに相手を受け入れ、本音で話し合うことのできる風土がないと、それは難しい。

また、個別な支援が必要な幼児へのかかわりに悩んだり、保護者への対応に戸惑ったりするなど、今日的な幼児教育の課題に直面している幼稚園現場では、「～な時には、〇〇すればよい」という明確な答えを求めている傾向もある。日々の業務に追われ研修の時間を見出すことが難しかったり、話し合いというしんどい作業を行うことが難しかったりすることから、専門家からの明解な指導を得たいと思っているのだろう。

しかし、本来は、保育実践の中で気になることや困ったことの事例に向き合い、園内で話し合っ解決の方法を探っていく過程こそが教員の資質向上につながるのだろう。そうできていない点が園内研修における大きな課題である。

4. 事業の活用と成果

ここまで、訪問の事例とそこから見えてきた本県の幼稚園教育の課題について述べてきた。

そこで、これらの課題を克服すべき有効な活用の事例として、第1に、S市とT町の取組、第2に、K幼稚園の取組について述べる。そして、県の事業としての成果と今後の方向性について探っていきたい。

(1) 有効な活用の事例

【活用事例1】講師の研修の機会を設けるためのS市の取組

S市では、平成23年度より教育委員会の幼稚園担当の企画により、講師の研修事業を行っている。教諭として採用された教員には、新規採用教員研修、10年経験者研修などによって、経験に応じた研修制度が

整っているが、講師として勤務する教員は、担任であろうがそのような研修の機会が少ないのが現状である。そのため、若年の講師のための事業である。

本年度は、年間数回の研修のうち幼児教育支援員派遣事業を2回活用して、研究保育と討議会を行った。

若い教員は、それぞれの園で保育に真摯に向き合っている。その中で様々な悩みや戸惑いを抱えているが、なかなか本音で語れないこともあるようだった。研修では、最初多くを語らなかった教員が、回を重ねるにつれ、思いを出し話し合っている姿が見られた。園の外に、日常の自分を出出できる語りの場が存在することは、大きな意味があるのだと感じた。

S市の事例は、行政として、市内の講師の資質向上のために本事業を活用したものである。市教育委員会や園長会等の理解と協力があつたからこそ、新しい試みが可能になったものだが、各園に講師が数多く配置されている現状の中で、その資質向上を図っていくことは行政にとって重要な課題である。同時に講師にとっても園外の同じ境遇の仲間との話し合いの機会をもつことで、日々の実践を振り返る機会となったことであろう。

せっかくの研修の機会を講師に限っていることについては、賛否両論あると言う。来年度に向けて、今年度の取組についての検証を行い、市内の教員全体の資質向上につながる取組へと改善していけるよう支援していきたい。

【活用事例2】町内の若年教員の資質向上のためのT町の取組

T町では、全ての幼稚園（4園）で本事業を活用して、町内の各園の教育力向上を図ろうとしている。園内研修（討議会）には、町内の若年教員が互いに参加し、町教育委員会の指導主事が同席することもあった。

保育参観の後の討議会では、その園の教

員が中心となって意見を出し合っていたが、私は、他園の教員に、「せっかく参加したのだから、何か喋ってから帰るようにしましょう」と声をかけ発言を促した。

訪問を始めた頃は、実践者による保育説明の時、子どもの様子や教師のかかわり、その時感じたことなどを網羅的に長々と話すことが多かったため、香川大学の教員から、「是非伝えたいことを端的にまとめて語ることも大切です」と助言されたこともあった。また、発言を促された他園からの参加教員も、何を話せばよいのか戸惑っているようだった。

しかし、回を重ね実践者の立場と参観者の立場を両方経験するにしたがい、若い教員が「感じたことや思ったことは、言わないと伝わらないから」と、率先して手を挙げて発言するようになってきた。また、少しずつではあるが、討議会で他の教員の発言を聞きながら、自園での実践とつないで、自分の保育を振り返ろうとしている発言が聞かれるようになった。

一人の教員が、「私は、前回保育を見てもらったときに、大学の先生から『子どもと一緒に、もっと遊びなさい。遊びの中で、子どものことをよく見るように』と言われて、この頃、しっかり遊んでいます。遊んでいると、子どものつぶやきが聞こえるようになってきました」と笑顔で話された。

事業の活用を通して、若い教員が変わってきている。どこがどのように変わってきたのか数量的な観点から説明することは難しい。だが、その表情が生き生きとしたものになってきたことから、質的な面での変化が読み取れる。若い教員が、互いに刺激を受け合い、保育に正面から向き合うようになり、主体的に保育について考えようとしている。

「子どものつぶやきが聞こえるようになってきた」と、保育の中の小さな喜びをはにかみながら話した教師こそ、【事例3】で述べたS教師である。子どもと一緒に遊べなかったS教

師のこの言葉からは、ようやく子どもと共にある生活の楽しさや心地よさを味わい始めたことや、保育の面白さに気づき始めたことがわかる。S教師にとって、ここが幼稚園教員としてのスタートラインなのかもしれない。

若い教員の小さな変化が、町内の幼稚園のあちこちに影響を与えている。積極的に自分の考えを発言しようとする若い教員の姿勢は、中堅教員やベテラン教員、さらには園長にも意識の変化をもたらしている。保育を公開した園の園長が、「今まで聞いたことがなかった職員の気持ちがよく分かった。知らず知らずのうちに職員を追い詰めていたのかもしれない。日々の保育を見つめ直してみます」と言われた。

本事業を通して、町教育委員会（行政）と香川大学と県教育委員会の三者が良好な関係を築いている。今後は、町教育委員会の指導主事を中心にして、さらなる幼稚園の教育力向上を図っていかれることを願う。そのための基礎づくりができつつある。

（2）教員集団の協働性の構築

続いて、K幼稚園の1年間の歩みについて述べる。

【活用事例3】K幼稚園の1年間

はじめてK幼稚園を訪問したのは、平成22年の秋のことだった。翌年、大きな研究発表会を控え、K幼稚園にとって、研究の方向性を定めることや保育の充実を図っていくことは、喫緊の課題だった。

（香川大学 山神眞一）

平成22年秋

園庭の真ん中に芝生の敷かれたスペース、その奥に園全体を包み込むような樺の木、その脇にこっぴりとした築山や砂場がある。心がワクワクするような園庭の環境である。

子どもたちは、登園後思い思いの遊びに向かっていたが、やがて全園児が集う「なかよしタイム」が始まった。全園児でダンスをしたり、フープや平均台、ボールを使ってコーナーに分かれて遊んだりする。子ど

もたちの動きから、日課に位置付いているこの活動に慣れていることがわかる。

途中で、違う遊び（ブランコや滑り台など）に行こうとする子どもには、教師から「こっちにおいで」と声がかかる。

朝一番に素晴らしい園庭の環境に感心したが、それらが園の子どもたちにとってかけがえのないものとはなっていないという思いが残る一日だった。

参観した様子や園内研修での教員集団の話から、全園児が同じ活動をする「なかよしタイム」の時間を大切にしていることが伝わってきた。「その時間の中で、挑戦することやあきらめずに頑張ること、異年齢の子ども同士の交流などいろいろな経験をさせたいと願っている」と言われる。「自由な遊びを広げてしまうと、教師が育ちの見取りをすることが難しいので、同じ活動（決められた遊び）の中で、育ちを見取ってきたい」とも言われた。

確かに、保育指導案にも、教えたいことや伝えたいことがズラリと列記されている。教師は、指導案に書いているように活動させたいという思いにとらわれ、指示的な言葉が多い。

園内研修の際に、香川大学の教員は、「子どもの遊びの動線から園庭の遊具について見直してみるとよい」と話された。筆者は、「主体的な活動である遊びが大切であり、遊びの中での子どもの様子をしっかりと見取ってほしい」と話をした。最後には、「今日の討議をもとに、今一度園の保育の在り方について見つけ直してほしい」と伝えた。

「幼稚園教育とは何か」と考えさせられることの多い一日であり、K幼稚園に大きな宿題を置いて帰ったような心持ちだった。園の教員集団で、どれだけ共通理解して話し合いを深められるだろうか。

筆者はその後、支援員派遣事業ではなく、香川県幼稚園教育研究発表会の事前研修会という位置付けで、季節毎に訪問を重ねた。K幼稚園は、そのたびに、公開保育、研究内容の報告な

どを行い、保育実践と向き合い続けた1年間だった。時に、香川県幼稚園教育研究会のメンバーからの厳しい助言もあった。筆者も、子どもたちの主体的な活動である遊びや教師の果たすべき役割について何度も話をした。

やがて、K幼稚園の園庭の環境が変わってきた。当たり前のように存在していた芝生広場が「裸足王国」と命名され、子どもたちの活動の場となっていた。また、大きな樺の木に梯子がかけられ、子どもが群がって遊ぶ「木登りランド」となった。

もちろん園庭環境だけが変わったのではない。そこにいる子どもたちが生き生きとした表情で走り回り、教師は子どもたちの遊びを面白がって見つめ、共に遊ぶようになった。

あれほどこだわっていた全園活動は姿を消し、子どもたちがやりたいことに夢中になって遊ぶ中で、K幼稚園がめざしていた異年齢交流、自分への挑戦、最後まで頑張る経験など、様々なことが自然な形でかつダイナミックに繰り返し広げられていった。

K幼稚園の教員集団は、降園後、毎日30分間の記録（自分への振り返り）と、実践を互いに語り合う会（交流）を行っていると言う。その成果なのだろう、討議会での保育説明も自分の言葉でポイントを絞って語れるようになった。前述したT町の【活用事例2】で「自分の考えは、言わないと伝わらない」と積極的に発言していたのも、実はK幼稚園の教員だった。教師の意識が変われば、こんなにも保育は豊かになるのだ。子どもたちと教師の生き生きとした遊びっぷりを見ながら感動を覚えた。

平成23年秋、研究発表会当日、県内の多くの幼稚園教員がその光景を目の当たりにした。「研究会に参加して良かったと心から思った」と語った教員もいた。

まだまだ若い教員集団は、幼稚園教育の基本である「遊び」について考え、園の環境を見直し、日々の保育の振り返りを継続することで、保育の楽しさや面白さを感じ、教師として育ち合おうとしている。

筆者は、K幼稚園での1年間から、たくさん

のことを学ぶことができた。子どもを見つめ、共に楽しさを感じ、育ちを喜び、そして、教師は伸びる。主体的な活動である遊び、環境による教育など幼稚園教育が変わらず大切にしてきたことに丁寧に向き合い、園の教育を見直していく過程で、教員集団の協働性をはぐくみできたのである。

(3) 県の事業として

ここまで本事業の具体的な事例を述べてきた。本事業による園の教育力や幼稚園教員の資質向上について、客観的に評価することは大変難しい。「～ができる」「〇〇がわかる」という見えやすいものではなく、また数値データに表しにくいものである。

しかし、本事業を継続していく以上、事業の成果を明らかにし、説明責任を果たしていく必要がある。そのため、今年度訪問した園については、今後、支援員派遣についてのアンケート調査などを行い、来年度の事業の在り方について改善を図っていききたい。

一方で、幼稚園の園内研修では、気になる幼児や事象についての具体的な事例からカンファレンスを行い、それらの見取りや教師のかかわりについて考える事例研究を行う場合が多い。このことは、幼児の育ちは大きな発達の方向性の中にはあるが、それぞれ個によって異なることや、家庭や幼稚園での状況や集団の中での人間関係に大きな影響を受けるものであり、個に応じた指導が必要であることを物語っている。そのため、具体的な保育実践の場を明らかにしながら、幼児理解や教師の援助について研究を深めるわけだが、そのように考えると、各幼稚園や各教員の置かれている状況や抱えている課題も、その園独自の歴史や地域性、人とのかかわりなどによって、発生してくると考えられる。そのため、園の教育力や教員一人ひとりの資質向上を高めていく際にも、本事業のような事例研究的な手法が有効であると考えられる。

しかし、県教育委員会が、県内の全ての幼稚園にかかわり、保育を参観したり園内研修へ参加したりすることは、時間的に不可能である。

また、公立幼稚園の設置者は市町であることを鑑みると、指導監督は、市町が行うものであり、県が直接指導することは難しい。そこで、市町の教育委員会等が主体となって、その地域の幼稚園教育の充実に向けて組織的な取組ができるような体制づくりを支援していくことが必要になってくる。

また、支援員の派遣を希望した園では、その園固有の課題について考えていくが、この時、支援員から一方的に指導・助言を行うことは、各園が自主的に園の教育や課題について考えようとする機会を奪うことになる。園の教員集団が自らその課題に気付き改善しようとするきっかけを作っていくことが、支援員の役割であると考えている。その中で得た知見を、県の園長会や研修会・研究会等において広く周知していくことが大切であると考えている。

これらのことは、4(1)で述べたS市やT町の取組に、県教育委員会として助言していった事例や、4(2)で述べたK幼稚園の1年間の研究にかかわりながらその育ちの過程と共に成果をモデル園として県内に広く普及している事例において具体的に紹介したことである。

以上のことから、県教育委員会としては、幼児教育支援員派遣事業において次の2点が今年度の成果であったと考えている。

- ① 市町の幼稚園教育の充実のための体制づくりの支援
- ② 主体的な園経営や教育力向上に向けた取組への支援とモデル事例の県内全体への啓発

今後もこの2点に留意して、各市町や各園の課題解決に向かってネットワークづくりをしていく必要があるだろう。

さらに忘れてならない点は、香川大学との連携による事業であることである。訪問前には、大概の園長が、「大学の先生が来てくれるなんて、怖いわ」「大学の先生に訪問してもらって、難しいことを言われても分からない」という話をする。大学の教員へのイメージは、「難しい」「偉い人」というものなのだろう。派遣を要請する際に、園長が二の足を踏まれる気持

ちも理解できる。

しかし本事業において、香川大学教員と県教育委員会の担当指導主事が支援員として園を訪問していることには大きな意味があると考えている。

筆者は、わずか9年足らずではあるが、幼稚園での勤務経験を有しているため、各園を訪問した際にも、実践者の目で子どもを見つめ、保育実践を語ろうとする。視点を子どもに近づけたり、園全体を見渡すことができるよう遠ざけたりしているつもりではあるが、見え方の基盤にはかつての自分自身の保育実践があり、それらと比べたりつなげたりして考えようとしている。

一方、大学の教員は、幼児教育にかかわる深い知見をもっており、専門家の目を通して保育実践について語る。毎回、大学教員のコメントを聞きながら、筆者自身が一番保育を見る目を広げることができているように思う。

このように、それぞれ違った立場から保育実践を切り取ることで、同じ保育であっても見えることや見え方が異なってくる。このことは、訪問している園の教員に、保育についての解釈が一つではないことや、多様な見方や考え方があることを暗に伝えていることになる。

また、訪問後に園長は、「大学の先生は怖くなかった」「もっと大学の先生のお話を聞いたかった」と言われる。市町や園によっては、大学の教員との関係づくりができ、事業の後も直接大学の教員に指導の依頼をしているところもある。

【活用事例1】のS市では、派遣の依頼があった2園はどちらも同一の大学教員（松本博雄）が訪問担当となったため、S市の状況を深く理解した上での指導が可能となった。一方、【活用事例2】のT町では、町内4園に3人の大学教員の訪問を依頼した。これは、大学のいろいろな教員とT町教育委員会や各園長が関係をもつことができ、今後、町で選択して指導を依頼してほしいと考えたからである。

つまり、本事業の成果の3点目は、

- ③ 各幼稚園（市町教育委員会も含む）と香

川大学教育学部と県教育委員会の関係づくり

ができる点である。

5. おわりに

ここまで、幼児教育支援員派遣事業で明らかになってきた本県の幼児教育に係る課題や、本事業の活用と成果について述べてきた。

このことから、今後の香川県の各幼稚園の教育力向上や教員の資質の向上のために必要なことを次の3点だと考える。

- ① 子どもと一緒に遊ぶ。
- ② 保育を振り返る。
- ③ 園内で本音で語り合う。

何も目新しいことはない。子どもの主体的な活動である遊びを通した教育を行う幼稚園が、これまで変わらず大切にしてきた不易のことである。しかし、その当たり前のことが難しくなっている今、もう一度原点に戻り、丁寧に保育に向き合うことが大切である。

そのために、本稿で検証した以下の3点がさらに充実できるよう、来年度以降の事業の見直しをしていきたい。

- ① 市町の幼稚園教育の充実のための体制づくりの支援
- ② 主体的な園経営や教育力向上に向けた取組への支援とモデル事例の県内全体への啓発
- ③ 各幼稚園（市町教育委員会も含む）と香川大学教育学部と県教育委員会の関係づくり

保育を見るのは楽しい。子どもたちの何気ない表情や仕草の中に、その子どもの抱えている思いを感じたり、子どもたちの小さなつぶやきから、その子どもの「こうしたい」という思いに気付いたり。傍らにいる教員の楽しさや嬉しさを同じように味わうこともあれば、教員の苦悩や葛藤にやるせない気持ちを募らせることもある。それでも、幼い子どもたちが、懸命に生きている姿に正面から向き合うことのできる保

育は、楽しい。奥深いがゆえに楽しい。

今後も、県内の各幼稚園で子どもたちが、心を揺らせ体を思い切り動かして遊び込むことができるよう、県教育委員会として保育現場のニーズに応じた支援をしていきたいと考えている。

【引用】

- 1) 「幼稚園教育要領解説」2008年1月 文部科学省
P. 23
- 2) 同上
- 3) 「香川県幼児教育振興プラン」2010年2月 香川県教育委員会 P. 4
- 4) 同上
- 5) 『保育のこころもち〈27〉保育者も「よく遊び、よく学べ」』秋田喜代美 2009年9月28日 日本教育新聞
- 6) 同上